

タウンカフェが生み出す新しい地域のつながり

太尾地区(港北区)

港北区太尾地区では、地区の魅力的な自然や歴史資産を活かしつつ、「街カフェ大倉山ミエール」などが拠点となって、子育て女性と店主たちのコラボによる、地域に新たな雇用を生み出し、コミュニティ経済を活性化する取組が始まっている。

1 まちの特徴

- 地区の大半は平坦な地形で、大倉山駅前は商店や医療機関も多く利便性が高い地域。
- 戦前から開発された東横沿線の良好な住宅地
- 北東部の公園や緑地、西部の鶴見川に囲まれ、自然環境にも恵まれている。
- 平成22年度からは、太尾地区連合自治会、大倉山商店街振興組合が中心となり、太尾地区を魅力あるまちにするため「大倉山夢まち



DATA	太尾地区		
	人口概数	世帯概数	高齢化率
1985年	18,400人	7,300世帯	6.1%
2000年	21,800人	9,900世帯	11.9%
2010年	24,000人	11,200世帯	15.8%

づくり実行委員会」を設立し、まちの魅力や課題を発見しようとする取組を始めました。大倉山の住民や訪れる方たちに、愛着を持ってもらうために、大倉山記念館周辺の坂道の愛称募集の企画、実際にまち歩きを行ったりしながら大倉山公園周辺の魅力アップについて検討を進めている。

2 多世代の交流を支える複数の拠点

太尾地区の「暮らしやすさ」を考えるうえで、ポイントとなるのが、地域の人たちの様々な交流を支える拠点が地区内の随所にあることである。例えば、連合自治会や地区社会福祉協議会・地区防災連絡協議会等が運営する「太尾防犯拠点センター」。青色回転灯を整備した防犯車による自主パトロールや青少年に対する見回り活動など本来の防犯拠点センターとしての活動に加えて、高齢者に対するパソコン教室が開かれたり、子どもの居場所づくり事業など多世代交流の場にもなっている。また地区内にある0歳から3歳までの未就学児と保護者のための居場所と相談支援機能などを兼ね備えた「地域子育て支援拠点・どろっぶ」も同様である。「太尾宮前地域まちづくり運営協議会」と連携しながら、「宮前・オリブ文化祭」といった地域の文化イベントに積極的に参

加したり、施設内で地域住民のためのコンサートを開くなど密室保育などで孤立しがちな子育て世代と多様な世代の住民との交流の場を生みだしている。「太尾防犯拠点センター」も「地域子育て支援拠点・どろっぶ」も「防犯」や「子育て」といった単一の機能やサービスに留まっていたら、地域の様々な人たちが交流する機会も、老・壮・青のつながりも生み出すことができない。地域住民のニーズや課題に柔軟に対応して施設機能の幅を広げているところがポイントだ。そして、防犯拠点センターにしろ、地域子育て支援拠点にしろ、その場所に様々な世代の住民が集うことによつて、地域社会全体で「防犯」や「子育て支援」に取り組んでいく土壌が形成されていく。すなわち、それぞれの施設が持つ本来の目的もより良い形で達成されるわけである。

そして太尾地区において、こうした多様な機能を各拠点でゆるやかに結びつける中間支援組織的な役割を果たしているのが、太尾地区連合自治会や大倉山商店街振興組合によつて結成されている「大倉山夢まちづくり実行委員会」(以下「実行委員会」)である。実行委員会では、太尾地区の住民や訪れる方たちに愛着を持ってもらうために、このような地域の交流拠点に集う人たちと連携して梅まつり、桜まつり、七夕まつりなど地域の様々な魅力興しイベントを行っている。

3 「コミュニティ経済の育む」 「街カフェ大倉山ミエル」

超高齢・人口減少社会において、地域の「暮らしやすさ」を維持し続けて行くためには、多様な人たちが交流し、世代間連携が実現するだけでなく、地域の様々な主体が知恵、モノ、カネ、サービスを持ち寄り、シェアしながら循環させていく仕組みづくりが大切だ。この仕組みを「コミュニティ経済」と呼ぶのならば太尾地区でその可能性を秘めている拠点が大倉山エルク通商店街にある「街カフェ大倉山ミエル」である。

2010年11月、大倉山駅近くに開設された「街カフェ大倉山ミエル」の運営者、NPO法人

▲街カフェ大倉山ミエルのメニュー

大倉山ミエルの代表・鈴木智香子氏は、建築士の資格を持ち、もともと、まちづくりに興味があった。2007年頃から大倉山地区で活動を始め、未就児童向けの「公園あそびの会」や、母親向けの絵本読み聞かせ講座、アロマ講座等を実施。2009年には、「大倉山文化村」というグループを結成し、「交流」「企画」「夢プロジェクト」をコンセプトに、コンサートやセミナー等、活動を拡

大。活動にあたり、区役所の助成金補助を受けていたため、定期的な報告(プレゼン)が必要であった。当初、煩雑さを感じていたこの報告の場が、現在、イベント等を共同開催している地元の子育て支援団体とも知り合うきっかけとなり、鈴木氏らの活動が地域住民や団体に周知されていく機会となっていた。

「街カフェ大倉山ミエル」は、もともと社団法人横浜市商店街総連合会と社団法人横浜建設業協会が連携して、商店街・建設業・地域の活性化を目指す「ヨコハマ商建連携事業の大倉山プロジェクト」の二環で開設されたものである。イニシャルコストは、商建連携事業が国交省から受けた助成金で賄った。また、ヨコハマ商建連携事業が行っている養蜂プロジェクトで収穫した横浜産はちみつを提供するアンテナショップという位置づけも有している。

ミエルの特長の1つは、「地域に根ざした飲食提供」である。ミエルの店舗はもともと飲食店の空き物件のため、厨房スペースを有効活用している。「ミエル」とはフランス語で「はちみつ」を意味し、前述の養蜂プロジェクトで採取された横浜産はちみつや、地元食材を使った料理が提供されるなど、地域に根ざした商品開発を心がけている。例えば、近隣(新横浜)の無農薬野菜を、定期的に店頭販売しながら、一部食材としても使っている。

このように生産者の分かる地元食材を提供することは、食の安全・安心に関心の高い地区の子育て層のニーズに即したサービスの提供にも

結びついている。

開設2年目の2011年秋からは、協力関係にある商店会、建設業協会以外の新たな企業とも連携を築いている。地元大手不動産会社と連携し、マンション入居予定者と地域住民とのつながり創りのためのセミナーやマンション居住者に大倉山を紹介するワークショップを開催している。大倉山在住のシニア層は、自分の子ども世帯との将来の同居先を検討する際、現在、住み慣れている大倉山周辺で探す傾向があるため、不動産会社にとっては、販売促進とマンションのブランドイメージのアップにつながり、ミエルにとっては、不動産会社からのセミナーの受託費などが収益確保につながり、互いにWIN・WINの関係になっている。

4 「夢・街ナビゲート大倉山」 「コンシェルジュパーク」の 実現に向けて

現在、太尾地区では、「街カフェ大倉山ミエル」に集う女性たちと「大倉山エルク通り商店会」の協働による新たなコミュニティ経済の拠点づくりが進んでいる。

大倉山という地域にこだわり、子育てをしなから自分なりの働き方や暮らし方を模索する女性たち(デザイナーや料理研究家、編集者、社会起業家、専業主婦など)が様々な知恵や技を持ちより「大倉山つながりJAM」というチームを2012年から結成。ミエルを拠点に



▲大倉山コンシェルジュパークの構想

七夕祭りやハロウィーンパーティ、クリスマス会などの商店街振興のためのイベントを商店主たちと一緒に繰り広げている。こうした地域の女性たちと商店主たちの結び目になっているのがエルム通り商店会会長の山田浩之さんだ。一般に外部の団体が、商店街と連携を持つとすると「よそもの、自分たちの商店街に土足で踏み込んでくる」という感情を持たれがちだ。しかし「大倉山エルム通り商店会」では、山田さんが中心になって、会員の商店主みんなで、とことん議論し、「これからの商店街振興は、女性とよそもの発想こそが大切」という結論を導

き出した。また山田さんはハロウィーンイベントでは、商店街の布田屋さんに特注した着ぐるみを身に付け、受け付けから参加者の案内まで買って出て、JAMのメンバーの女性たちの「アイドル」になるなど八面六臂の活躍ぶりだ。こうした山田さんの仲立ちもあり、イベントを重ねるたびに、大倉山の商店街とつながりジャムのメンバーとの信頼関係が築き上げられるようになった。こんな活動の中で持ち上がったのが、これまであまり利用されてこなかった商店街の振興会館を地域の情報発信基地として有効に活用しようという企画。「夢・街のナビゲート 大倉山コンシェルジュパーク」と名付けられたこの構想は、振興会館の建物を地域の住人により開かれた「インフォメーションセンター（情報発信・地域イベントの広報・事務所・ワークショップスペース）」として整備し、振興会館付きの駐車場を地域住民の憩いの場・子連れ親子のための遊び場・イベント時の舞台として利用しようというもの。そして整備のためには、まず初期費用が必要ということで、「大倉山つながりJAM」と「大倉山エルム通り商店会」との協働で「ヨコハマ市民まち普請事業」に応募することにした。JAMの女性たちが構想を練り、プレゼン資料を作成するにあたっては、商店主たちと意見交換を重ねながら家事や育児、仕事の合間に、ソーシャルメディアを活用して資料づくりの作業を進めた。その結果、2013年の2月3日に行われた「公開選考会」で整備助成対象提案として認められ、横浜市からの助成

金を得て、いよいよ構想を実現する段階となっている。「大倉山コンシェルジュパーク」が実現すれば、太尾地区のまちづくりと商店街振興に向けて、子育てをしながら自分なりの働き方、暮らし方を模索する女性たちと商店主たちとの日常的な協働の場が生まれることになる。もともと商店街は、地域の中でモノ・カネ・サービスの循環が生み出すコミュニティ経済の現場であると共に、それを通じて自然と街全体で高齢者を見守り、子育て支援を行う仕組みを持っていた。大倉山の取り組みはまさにこのような商店街の機能を今の時代に相応しい形で再生しようとする試みでもある。



◀街カフェ大倉山ミエルのワークショップ

自ら着ぐるみを着てイベントを盛り上げる商店会会長▶

